渋沢栄一 儒教に見た指針

「日本資本主義の父」と称され、生涯を描いた大河ドラマ「青天を衝け」が放送中の渋沢栄一は、儒教の経典「論語」を指針とした。なぜ、封建制度を支えた儒教の教えを、近代に採り入れようとしたのか。

狩野探幽「四聖人像のうち孔子」（倉吉博物館蔵）＝部分

中国・春秋時代の思想家
孔子
前551?～前479年

儒教とは

孔子を祖とする教え。四書五経を経典とした。漢の時代に国教化され、清まで王朝支配を支えた

五常

儒教で基本になる五つの道徳「仁義礼智信」　※渋沢栄一の解釈

- 仁：最高道徳。ものごとを健やかに育む
- 義：みんなのためを考える
- 礼：礼儀を身につける
- 智：ものごとの内実を見通す
- 信：信頼される

五倫

儒教で基本になる五つの人間関係
『孟子』から

論語の言葉

巧言令色、鮮きかな仁
言葉を巧みにして顔つきを飾る人には、少ないものだな仁は

義を見て為さざるは、勇無きなり
なすべきことを見ながら実行しないのは、勇気がないのである

未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん
まだ生を知らないのに、どうして死を知ることができよう

古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にするなり
昔の学者は自分のために学問し、今の学者は人（の評判）のために学問する

渡邊義浩「「論語」孔子の言葉はいかにつくられたか」（講談社選書メチエ）の「論語集解」抄訳から

国の史跡「湯島聖堂」。江戸幕府5代将軍綱吉が建てた孔子廟で、後に儒教を教える幕府直轄の学問所となった

道徳経済合一

利益（算盤）を追求する際には道徳（論語）は無視されがちだが、両立させることの大切さを説いた

道徳（論語）＋利益（算盤）

王子製紙　第一国立銀行　日本鉄道　など

多くの会社・事業の創設・育成に関わった

日本資本主義の父
渋沢栄一
1840～1931年

儒教の道徳を採り入れた渋沢栄一の考えは…

扉

儒教の始祖・孔子（前551？～前479）は、中国・春秋時代の魯の思想家だ。動乱期に理想の政治を追求したが、政治家としては不遇で、晩年は弟子の教育に努めた。儒教は漢が前2世紀に国教化したとされ、以後、清の20世紀初めまで中国の王朝支配を正統化してきた。

儒教の道徳に「五常」の「仁義礼智信」がある。早稲田大学の渡邊義浩教授（中国古代思想史）は、孔子がこの中で重視したのは、「仁」と「礼」だと説明する。「分かりやすく言うと、人としてどうあるべきかが『仁』、社会の中でどう生きるかが『礼』です」

一方、基本とする人間関係に「三綱」「五倫」がある。「三綱」は父子、夫婦、君臣の関係で、「五倫」は長幼、朋友が加わる。親に「孝」を尽くすことが最重要で、臣下は君主への「忠」が求められた。妻は夫に、年少者は年長者に従う。儒教は秩序を重視し、体制維持に役立った。

孔子の没後に、孔子や弟子の言行を全20編約500章にまとめたのが「論語」だ。渡邊教授はその成立を前漢（前202～後8）とみる。宋代の12世紀に朱熹によって四書五経の経典に格上げされた。渡邊教授は「『論語』は東アジアで最も読まれた古典。それぞれの解釈で内容を説明する『注』によって理解されてきた。論語の読み方は様々で『注』は古今で3千種類はあると思います」と話す。

?

日本に儒教が広まったのは江戸時代だ。二松学舎大学の牧角悦子教授（中国文学・日本漢学）は、江戸時代と漢代は似ていると指摘する。「乱世には武力が必要だが、統一後は体制維持のために秩序と理念が必要になるからだ」

徳川幕府は、朱熹が儒教を再解釈した「朱子学」を官学とした。牧角教授は「『修身斉家治国平天下』という言葉にそのエッセンスが詰まっているという。「まず、自分自身が儒教的な精神を整えて身を修める。それが家を整（斉）えることにつながり、国が治まり、最終的には天下国家を秩序づけることになる」

江戸後期になると「寛政異学の禁」で朱子学以外が禁止され、朱子学がさらに広まった。「各藩の武士は藩校で、庶民は寺子屋で学んだ。『論語』を通じて、身分に応じた道徳理念や清廉の思想を身につけた」

その一人が、豪農の家に生まれ、武士、官僚から商人に転じた渋沢栄一だった。牧角教授は「渋沢も、まず修身が大事だと繰り返し言っている」と話す。

!

渋沢の考えは『論語と算盤』（1916年）に記されている。講演をまとめたもので、2010年出版の『現代語訳　論語と算盤』（ちくま新書）が60万部発行されるなど、現在も広く読まれている。

同書の訳者で作家の守屋淳さんは、企業経営者が注目する理由の一つに、08年のリーマン・ショック以降に欧米流の強欲な資本主義が行き詰まりを見せていることを挙げる。「原点に返り、日本人が資本主義を導入したころに重視していた価値観を振り返ってみようということではないか」

大蔵省を辞めて実業界に転じた渋沢は、金もうけはいやしく、官が民よりも上だと思われていた明治初期の状況に対して、それでは日本は豊かにならないと主張。「論語」から商業道徳を見いだし、「私」より「公」の利益を優先して大いに働くべきだと説いた。

興味深いのは、道徳には世の中の進歩に応じて変わるものもあると渋沢が述べている点だ。例えば、女性を男性と同じように教育すれば、倍の人数の活用につながると主張している。

守屋さんは言う。「『論語』は解釈の幅が広い。渋沢は算盤（利益）の問題を論語（道徳）の価値観で、論語の問題は算盤の価値観で何とかできると考えていたんです」

（文・西田健作　グラフィック・小板橋美子）

中国では束縛　日本では教養

作家　楊逸さん

「論語」にある孔子の言葉の一つ一つは、ためになるものが多いんです。問題なのは、その使い道。中国では漢代に国を治める基本になり、隋（581～618）でその知識を問う科挙（官僚登用試験）が導入されると、みんながその教えに従いました。

中国で重視された教えは、ひと言で言うなら「強い立場の人に、弱い立場の人は素直に従え」というもの。身分によって、父親や上司、夫に服従しないといけない。しかも、目上の人が過ちを犯しても、恥をさらすようなことはしない。

2千年もそういうシステムでやってきたので、今の中国でも変わっていません。素晴らしい建築素材で刑務所を作っているようなものです。

でも、日本に伝わっているのは、孔子の教えの原形だと思います。論語を一つの教養として受け入れ、自分の行動規範にしている。

中国のように子どものころから儒教の教えをたたき込まれているわけではないので、こうあるべきだという束縛をあまり感じません。

日本では明治時代に西洋の教えも参考にしてきた。多くの教えから良い部分だけを採り入れるのはバランスの良い賢いやり方だと思います。

読む

曹操の寵愛を受けた何晏の論語解釈本『論語集解―魏・何晏（集解）』（上下巻）が、渡邊教授訳で12月20日に早稲田文庫から出版予定。牧角教授が編者に加わった『講座　近代日本と漢学』（戎光祥出版）のシリーズもある。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。